
棧田教諭と生徒達

巳田 弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

棧田教諭と生徒達

【Nコード】

N7804V

【作者名】

巳田 弥

【あらすじ】

緑風高等学園の倫理教師である棧田は、学園の事情で次年度三年生の受け持ちから、新入生の学年の受け持ちに組み替えされる。連載中『本條玲子とその彼氏』番外編。倫理教師？棧田の日常と彼から見た本編メインの生徒達の各小話。本編を読んでいなくてもお話は通じます。

組替え

緑風高等学園。

通学圏となる地域在住で、底々誇れる学力がある子供を持った親なら、ひとまず受験させてみようと思いつ先に思い浮かべる一校である。

都心から約一時間圏内という郊外の立地を活かした広い敷地と充実した設備。

今時珍しく非常勤や臨時は一切雇わず、1科目につき専任教師最低1名という過剰なまでの教員数は、教科単位ではなく学科単位でその授業を選択した生徒を指導するためのものであった。

例えば社会科分野なら、一般的には3、4名程度の教師が細分化される科目を兼任するケースが多い。

特におれの様な「倫理」なんて科目は、大抵の場合「倫理・政経」なんて無茶な感じに一緒くたにされるものだが、緑風高等学園では「倫理教師」は「倫理」以外に教えない。

大学受験上、蔑ろには出来ず必修科目設定な「世界史」や「日本史」は範囲が広さと授業を選択する学生数が多いため、各2名体制だったりする。

比較的科目数の少ない社会科分野でこの教員数なため、科目の多い国語・数学の分野だと結構な大所帯となる、その辺りは流石は歴史と実績のある私立の名門進学校とでも言おうか。

当然、入学金と授業料および設備援助等諸費用は他の私学に比べても少々お高めだが“勉強機会の均等”を志した創設者の意向により、独自の奨学制度も多々用意している。

とはいえ、現実的に入学してくる生徒の家庭の経済状態は中流上の家が多かった。

ここ十数年来、ランキング上位大学への進学率は実に七割を超えている。

単純に大学への進学率ならほぼ100%。

付属大学を持たず中高一貫でもない私立高校としては、なかなか驚異的な実績だ。

入学試験は難関な方だろう。

そんな学校であるから、やって来る生徒はさぞ面白みのない優等生が多いかと思いきや、リベラルな校風のためか、おれが面白いと思うそれなりに個性的な奴も結構やって来る。

合格通知を出した学生の入学書類も一通り集まり、次は新入生受け入れの段取りにかかる職員室は、近年では久しい所謂地元の名士の子供が入学、それも二人もということやや浮き足立っていた。

「名士ねえ・・・」

どうせ至極つまらないボンボンかお嬢さんか、もしくは平凡な我が身以上の賞賛と厚遇を望むただ厄介で迷惑なだけのガキかどっちかだろう。ある種後者であつた我が身を振り返りながら、喫煙所

以外は校内禁煙のために紫煙が口恋しいのも相俟つて顰め面で職員室を後にし、自分の根城である社会科準備室へと向かおうとしたところで「棧田先生！」と、甲高い中年女性の声に呼び止められた。

「なんですか、真野先生」

「えっ・・・と、あの」

歳はおれより一つ下、新卒で採用され、教員として三年先輩となる国語科の女教師は、職員室の三年受持ち担当組のデスク島でおれの背後の席に座っている。

職員室の人間関係を疎んじておれがいつの間にか姿を消すことを快く思っていないらしい、常に鼠色のスーツにきつちり身を固めている彼女はきつと用件の前に何か言い添えたかったのだろうが、予想外におれが素直な返事をしたので出鼻を挫かれたように一瞬うろたえた。

一対一の優位争いの場合、勝負は最初の一瞬でほぼ決まる。

うんざりした気分を振り返る一瞬の間で抑え、人好きする感じのいい笑みに切り替えるのは我ながら一種の完成された芸の域である

と自負している。

どこか険のある常識ぶった女性は、老いも若きも関係なく敵に回すと面倒だからな・・・とは、おれの父親と、そんな女性が眉を顰める類の話を書く作家であった母親専属の編集者と、歳の離れた兄の様な他人の精悍な画家という三人の男達共通の教えである。

全員いつぺんに事故みたいなものでも亡くなったため、彼等の教えは遺言みたいなものだ。

三人とも母をこよなく愛して共存共生、奇妙な家族関係を母を中心に築いていたが、同時に母と出会う前はそれぞれ極悪人レベルの遊び人であった。

父親なぞ結婚前に心中騒ぎを二度も起こしている。

資産家の一人息子だったゆえ、二つの騒ぎともに世間ではなかったことにされてはいたが…。

とにかく、性の芽生えもへったくれもない小学校低学年の頃から最終的に遺言となった教えを受けているので、その条件に合致する女性に当たり障りなく親切気に対応するのはもはや条件反射に近かった。

「授業もないのにどちらへ？」

「学期末の考査も終わりましたし、来年度を迎える前に準備室の資料を整理しようと思ひまして・・・何か御用ですか？」

「いえ・・・ところで、先週の職員会議あなた出席されてなかったでしょう？」

そりゃ、あんな詰まらん時間の浪費に付き合えるか・・・という言葉は、胸の内だけに留め、そうでしたっけと記憶を探るような表情で首を傾げ、5秒数えて思い当たったと顔を上げる。

「ああ・・・体調崩しまして、学年主任の橋田先生には断り入れませんでしたよ」

「ええ、存じ上げてます。もしかして・・・何も聞いてらっしゃらないんですか？」

「何を？」

前置きはいいからさつさと用件を言えよ・・・と思いながら、胸ポケットへ左手をやって問い返せば、大仰な溜息をついた彼女は「橋田先生もつとすっかりしてくれないと・・・」と、会議欠席の断りを入れた学年主任の教員を嘆く呟きを発した。

「棧田先生、来年度に私の受け持つクラスの副担任になりましたから」

「は？ おれは二年組ですが・・・」

来年度は三年に進級する学年の受持ち組だ。

やっぱり副担任だったが、これから受験の学年組から新入生の受持ちに回されるなんて普通はない。

この学園の売りの一つは『生徒へのきめ細やかな指導』であり、そのため教師は入学年度毎に担任・副担任・学年主任でチームを組んで、生徒の進級に合わせて担当する学年も繰り上がっていく。

怪訝そうに真野を見れば、迷惑そうな表情をして声を潜めた。

「定年予定の先生と入れ替わりになる予定だった新任の先生から、急に着任できないと連絡が入って…編成替えせざるを得なくなったんです」

「はあ」

「詳しくは校長先生からお話がありますので。教職員への正式な連絡は再来週・・・まったく最近の若い子って何考えてるのかしら？ いい迷惑だわ」

着任前に辞めたんなら被害は少ないと思うがとつい口を滑らしかけて噤んだが、噤む必要もなくほぼ同時に突き出された封筒に遮られただろう。

「こちら、新入生の入学書類のコピーです。来週までに確認下さい」「もうクラス編成まで決めたんですか？」

「新入生の情報をデータベースに入力するのに時間を要するので、毎年早めに編成する流れでしょう？」

「そうでしたっけ？」

担任持ったことは無いし、自分に直接関係無い事柄には無関心だ

つたため、そんな流れは聞いたかもしれないが記憶になかった。

「あなた…一体、何年この学園にお勤め？」

「はあ…すいません」

かちんとくる物言いだったが、同レベルでむきになるつもりもなかったので、へらりと受け流せばあからさまに呆れを滲ませたため息を吐いた。

人を前にして失礼な女だ。

「…こちらはまだ暫定です。次回の学年の連絡会議で最終確認します」

「そうですね」

「教職員への正式連絡前になりますが、こちらの連絡会議にも出席ください」

当然のようにさらりと告げられた言葉に、ちよつと待てと思う。

いくら編成替えでも来年度の話だ。

いま二年組の島に属している事には変わりない。

学年別の連絡会議??またの名を教師による生徒の愚痴会。

または教師による教師のためのお悩み相談会、あるいは馴れ合いの絆確認会。

あの、生産性皆無な会議を二倍の回数出席しろと?

「あ…、真野先せ…」

「それから!」

まだあるのかよ…。

心境的にはまさにやさぐれた暗黒の学生時代に戻った気分で、しかしそんなことは表面には出さずに、何でしょうという微笑を浮かべた。

心境はやさぐれ学生でも、三十路もとうに過ぎた大人の男だ。

まあ、ちよつとばかし引き攣っていたかもしれないが…。

「社会人なら体調管理も仕事のうちでしょう。煙草、お控えになつてはいかがです？」

胸ポケットに添えた左手を見やりながらの真野女史の有り難いこ

忠告に、間違いなく片頬の筋肉がひくんと小さく痙攣したのを自覚した。

たしかに…最近の若い奴はなに考えてるのだから。

いくら教員暦が少しばかり長いからといって、年上に向かって口の利き方がなつちやいない…そうやってツンケンと人を見下すような態度を取るから、恋愛だの縁談だのが悉く破談になるのじゃないのか？

見た目はそう悪くない女なのになあ…まあ、こういう取り澄ました女を落とすのは案外簡単で、下克上の啼かせ跪かせるのも一興と言えば一興なんだが。

いや責任がどうのその後が面倒か…いやいやそうではなくて？！。

「棧田先生、聞いてらっしゃいます？」

「ああ、いえ…ご高説ごもつともと思ひまして」

尻なんかはいいい形してるんだがなあと不埒千万なことを腹いせ半分に考えながら、突き出された封筒を片手に取り上げた。

「それに職員室の“高値”の花である先生とタッグを組めるとは、光栄だ」

皮肉と思つたのだろう。

事実、高嶺とは違う意味の言葉のつもりで言つた皮肉なのだが。

きりつと眉を吊り上げかけた相手にすかさず邪気のない微笑みを見せ、周囲を意識したように声のトーンを落として「本当です」と呟けば、何か納得いかないような表情でやや頬を紅潮させて黙り込んだ。

それをあえて思わせぶりにしつかり見届けてから、背を向ける。

まったく…これだから職員室は嫌になる。

そうでなくともこの学校は職場にして母校でもあるから、まだ新米の頃は古株の教員は生徒の頃のおれを知っていて何かと難儀した。流石に卒業から二十年近くも経つと、その数も少なくなってきた。はいたが…定年前でも公立の教員俸を取り付けた等、色々な理由で離職する者はいる。

「まったく、面倒くせえなあ……」

本校舎の各階にある喫煙所に辿り着く前に胸ポケットから煙草の箱を取り出しながら、おれはぼやいた。

File 1・本條玲子

束になったテスト用紙を手に教壇に上がり、神妙な顔つきで着席している生徒達を見下ろしてすぐ、名前を確認するまでもなくこいつかと思った。

そんなわかりやすいキャラクター設定は今時の映画だってないぞ……と、一クラス30名の生徒中、別格な存在感を放っている美貌の女生徒に思う。

教師は自分の分野しか教えないが、定期試験中の、テストの監督はまた別の話だ。

当然そこに担任も副担任も、本来の担当クラスも関係ない。

一年一組、本條玲子。

この街の東にある高級住宅街に、重要文化財級の洋館を構えていることで有名な本條家のご令嬢。

そもそもあの一帯が高級住宅街になったのは、そこに“本條家の洋館”があったからとも言われている。

納付も金額も任意な寄付金にも関わらず、教頭が丸一日拳動不審に陥る程の高額な設備援助金をぽんと振り込んでくれたらしい、学
校経営的には神様みたいな保護者をもつ生徒。

保護者が神様なら、その娘はさしずめ天使つてとこか……そんな考えが冗談にならない純真可憐を絵に描いた様な美少女だ。

昔も今も重苦しい紺色のセーラー服が、なにか洗練して見える。

こりゃ馬鹿でなくても男子共ガキが騒ぐな、下手すりゃ教師も危ないかも……頼むからファン活動が過ぎた事件沙汰だけは起こしてくれ
るなよと思いつながら、教壇にテスト用紙をトンと縦に下ろした。

「一年のお前らは入学コースなんか関係無しの評価だからな、心して
解けよ」

そう告げれば、クラスの二割程度の生徒があからさまに表情を曇
らせる。

芸術コースの生徒達だろう。

実技試験が厳しい分、普通科より入試の筆記テストは幾分か易しい。

入試は普通科と芸術コースに分かれているものの、一年生は国立理系も私大文系も美大も音大も志望関係なく、生徒は皆、混合シヤッフルされてクラス編成され、強制的にあらゆる教科を同じ単位数で学ばされ、同じ土俵で評価される。

これが世間で有名な「緑風の入試詐欺」である。

選択教科のカリキュラムは別になっているし、二年生からは本来の志望コース別にクラスは分かれるが……。

そして、一年時最初の間テストは難易度高めな問題設定にするのがこの学校の慣例だ。

というわけで??。

『二次関数を解法に用いる問題を創作し、その証明を記せ』なんて問題が数学のテストなんかにあったりする……これ作ったの学年主任の杉田だな。

問題作れてなんだ、しかも証明しろだと?!

そりゃ教科書の試験範囲だがこれは反則だろ、そもそも問題作れよ……と用紙に毒づいたのをよく憶えている……文系人間のおれがかつて時間を大いに取られた十数年前と同じネタ使い回しやがってあの数学科のじじい。

いかにも好々爺な感じでいてサディストな、過去の担任、現在の我が上司に小さく舌打ちしながら縦に五列に並んだ席の先頭に小分けにしたテスト用紙を配る。

「後ろの席に回せ。忠告してやるが、馬鹿正直に上から問題解いて余裕ぶつてたらあつという間にタイムアップだぞ」

なんですか、それ……。

ぼそぼそと反応を小声で返す複数人の生徒達の声に、にわかには教室がざわつくのに静かにしろと注意しながら、腕に巻いたステンレスチール製の機械式時計の時間へと目を落とす。

文字盤の10を過ぎる秒針、5、4、3、2……。

「……始め！」

それまでのざわつきがピタリと止んで、かりかりと一斉にテスト用紙に名前や解答を書き込む音が教室に満ちるのを聞きながら、おれは教壇の端、窓近くに教師用の椅子を置いて座って足を組み、つい左手を胸にやって途中で気がついて止めた。

ここは試験真っ最中の教室だ、煙草は吸えない。

本当、面倒だ……大体、試験監督なんて自分の仕事がある場で出来るわけでもなし、手持ち無沙汰で仕方がない。

ふと、座っている場所から対角の位置を見れば、髪の毛を後ろに引つ詰めた少女がしかめっ面でテスト用紙を睨んで手を完全に止めていた。

おれが顧問をしている図書委員で副委員長をやらせているから名前と顔が一致している、佐竹風音だ。

生真面目だが意外と融通も気も利く、言い方は悪いが便利で可愛げのある生徒。

もちろん誉め言葉だ。

そっぴや、あいつ数学苦手らしいって三橋から聞いたな……。

おれが副担任を務めているクラスの静かなる問題児、あるいは本條家には及ばないもののもう一人入学してきた名家の子供^{ガキ}で、事情があつて強制的に図書委員長にした男子生徒??こちらは便利でもないし可愛げもない??から得た情報を思い出し、心の中で合掌した。

あの様子ではたぶん、追試だろう……可哀想に。

ならば、天使の方はどうかと視線を移せば、やけに楽しそうな表情で小首を傾げて考えている。

あちらさんは大丈夫そうだ、往々にして天は二物三物と一部の人間に与えるものである。

それが、本條玲子という生徒に対する最初の印象と感想であつた。

「棧田先生ー！ 質問、質問！ 人は死んだらどうなるんですか？ たまにだが、ふざけ半分にこういった質問をする馬鹿な生徒^{ガキ}が現れる。」

「ああ？」

「だって、先生倫理だろ？ 宗教とか死後の世界とかそういうのやつてんじゃないの？」

生徒も二学期後半ともなれば、相当図々しさが増してくる。

まあおれ自身がその極みみたいな学生だったが、とりあえず教師に対して敬意など、奴等には欠片もない。

それはいいとして、まったくおれは二組の副担なのにどうして一組のホームルームなんてやってんだか……小学校低学年の子供のいる女性教諭を感染源にして、ただいま職員室ではインフルエンザが猛威を揮っている。

生徒の間にもで流行させる訳にはいかないため、体調不良者は即診察、発熱したら即病休を取れとのお達しで実に人員の二割が病欠なり早退なりしているが、ここまで流行れば生徒に飛び火するのも時間の問題だろう。

普通は生徒から流行るものなんだが。

一年担当組でいえば二十名中七名の教師がいない異常事態だ、感染源の教師はおれのシマからだから仕方がないといえば仕方がないが。

普段から職員室と疎遠なおれは、難を逃れた。

真野はだらしがらないだの自覚がたりないだの、毎日のようにぶちぶち文句を垂れている。

馬鹿面下げた男子生徒を教壇端の椅子に座って斜かに軽く睨みおれは色々な思いを含んだため息を一つ吐いた。

高校倫理という学科に対する大いなる誤解だが、とかくそんな誤解を受けやすい教科ではある。

「今週のマンガにそんな展開でもあったのか……あのなあ、キリストとか仏陀とか確かにやるけどそんなのじゃない」

ホームルーム前の休憩時に、机の上で堂々と週刊の漫画雑誌広げていたのをさつき注意したばかりだ。

この学校の規則は緩いが、だからって雑誌だなんだと必要ないものの持ち込みをよしとはしていない。

この組は仕切役の生徒が弱いな、二組ならクラス委員の三田村が、真野の機嫌を損ねないよう、その手のくだらな逸脱行為は隠蔽し、性質の悪いのは禍根を残さないやり方で制裁してくれる。

温厚な性格と正反対に、人相体格が高校生離れして極悪な奴だから睨みが利くし。

心情的にはお気に入り生徒なんだが、ちよくちよく顔を出しているバーが奴の父親がオーナーでその家業手伝いを黙認しているため、それ以上の馴れ合いは出来ない。

「そうなの？」

きよとんと間抜けな様子で聞き返してくる。

歴史ある進学校なんて評判だが、実情はこんなものだ。

「そうなの。人とは？ 生きる意味とは？ みたいなことをだな、先人が考えたの参考にして自分で考えるって授業」

真面目に答える自分もどうかと思っただが、性分だから仕方ない。

「へえ……」

「おれに言わせりゃ人なんてな、死んだら焼かれて骨になって仕舞いだ」

「うわっ、先生ひでえ！！」

「何がひでえだ、真実だろ……ちやつちやつと終わらせるぞ」

ひとまず気が済んだらしく黙った生徒に、成り行きやおれの返答を楽しもうと興味津々でざわついていた生徒達が肩すかしをくらったように静かになった。

どんな美人も紳士も仕事人も芸術家も、死んだらそこで終わりだ。四角い箱に入って、裏庭の片隅にある使用禁止の焼却炉を大きくしたようなので焼かれ、後に残るのは、他人のものと紛れたら見分けのつかないバラバラの骨だけ。

おれはそのことを、こいつらと同じ年頃に知った。
実体験として突きつけられた。

高校入学前の春に、おれの両親と愛すべき同居人だった二人の男
達は、事故で皆ほぼ同時にこの世におれ一人を置いて消え、後に白
く小さな骨だけが残った。

いまも墓石の下に、壺に入ったそれはある。

一つの壺に四人一緒に入れてやった。

同居人の二人はそれぞれ遺骨の引き取り手があったが、こっそり
一部を掠め取った。

あいつらは一人一人はとても寂しがり屋な大人達だったから、離
れたらきつとあの世でも泣くだろうと。

「ええと……文化祭の会計報告が今日締め切りだが、係りは誰だ？

おい、風音？」

「……本條さんですけど。先生……委員会の力関係、持ち込まない
てください」

「仕方ないだろ、担任の志摩先生も副担の野末先生も休みで代理の
代理なんだから」

ぼやくと、なにがおかしいのか教室中に笑いが起こった。

「あー、じゃあ……本條、あとで報告書持って社会科準備室に来い」
一学期の中間テスト以来、隣ながらこのクラスと接点がないため
大半の生徒の顔と名前が実は一致していないのだが、本條はわかっ
た。

「はい」

初めて声を聞いたが、姿を裏切らない声だ。

ちりんと鈴を転がした様に、小声でも澄んだ響きでよく通る。

そして小さく手を挙げこちらを真つすぐに見つめる、邪気のない
黒目がちの眼差しに引き込まれそうだった感覚に一瞬怯んだ。

天使じみた見た目が結構気に入ったため、風音同様、気に入りの
生徒への態度の常で名前を呼ぼうとした矢先のこと、おれは本條
を気に入りの生徒から即座に外した。

美と知の申し子達で風変わりだった家族に鍛えられた、おれの、他人に対するある種の察知能力が本條と距離を取れと訴えている。

三橋にも近いものを感じたが……あいつとはまるで質が違う。

奴とは師弟の位置を取ることと線を引いているが、本條は単純に関わらないのが身のためのような気がした。

けして男女間の衝動的な意味ではなく、かといって誘惑でもなく、もつとなにか……。

「それと、先日配ってるはずの進路調査表についてだが、ちゃんと家族と話し合えよ。黙ってたって三者面談で暴露せざるを得なくなるんだから」

はい、とやる気がなさそうな複数の声がぶれて耳に届き、一通りの連絡事項を伝達した後はクラス委員に無理矢理仕切らせて、ホームルームを終わらせた。

『棧田先生が一年に移っちゃって、残念……』

やや鼻にかかった気怠い甘え声に、授業のプリント制作の手は止めずに苦笑した。

たかだか十八歳の癖に立派に大人の女の甘え口調だ。

窓がドア向かいに一つしかなく、左右の壁に並ぶ教本用の背の高い灰色のスチールキャビネットによってよりその閉塞感を高めている、八畳程の部屋。

五つ固めて置いた殆ど使われていない教員用の机も椅子も灰色。

壁と天井はどことなく煤けて退色しているため、灰と砂の間みたいな色になっている。

昨年度末に張り替えたリノリウムの床だけが、かるうじて明るいベージュだった。

およそ生産的な仕事には向かない監獄のような部屋だが、それでも職員室よりはずっとましだ。

『どう？ 異動して』

『どうもこうも、おれからすれば一年も三年も別に対して変わらん』

おれの授業はコースカリキュラムによって変わるが二年と三年の選択教科に組み込まれている。

一年組に移ったところで、授業で顔つき合わせるのはこいつと同じ三年生が大半だ。

『ま、ただの職場の都合ってやつだ』

『先生もサラリーマンってことか、ああやだよだ』

さばさばした物言いにはちりと目線だけを、向き合っているノートパソコンの画面からずらし向いの空デスクに移せば、本来なら担当していたはずの三年生の女生徒が背まで伸ばした栗色の髪を肩から背に振り払って、勝手知ったる振る舞いで淹れたコーヒーマンの入った教員用の紙コップを口元に当てている。

『お前な、この世で尊い人種の一つだぞサラリーマンてのは』

『だって……』

ぶすつとしそうなのを寸でのところでクールに振る舞おうとしているところに可愛げを感じ、手を止めてそいつの顔を見た。

『おれにもくれ。休憩だ』

『えー、自分でやってよ。面倒くさい……』

そう言いつついそいそと、準備室の出入口側の片隅に備え付けたコーヒーマーカーの方へ歩いていく後ろ姿は、セーラー服を脱げばもう大人と大差ない。

おれの鼻肩はあくまで生徒として気に入っているからで男女の区別はなく、もちろん恋愛的好意とは無縁なものだが、それを理解する女生徒は少ない。

普段、他の教員はあまり来ない社会科準備室にひきこもっていることもあって、実を言えば何人かの生徒に言い寄られたことがあるが、生徒を対象に色恋沙汰などまったく興味がないため、皆、素知らぬふりで流すか断った。

こいつは数少ない物のわかった側の女生徒だ。

ただ年上の男に甘えるという、行為だけを楽しんでいる。

『あ、そうだ。棧田先生、一年生といえはすっごいかわいい子いる』

でしょ？』

カサカサとコーヒーの粉をセツティングする音と一緒に、後ろを向いて少しこもった声が聞こえた。

『本條玲子って名前の子、すごいお嬢様で下手な芸能人とかよりずっと綺麗なの。同じ中学でね』

『ああ、本條か……中間テストの時見たよ。たしかに美少女ってのは本当にいるんだなって感じだったな』

『でも、お気に入りにしちゃ駄目』
『は？』

こぼこぼと湯が沸く音を打ち消して、クールぶった普段の柄に似合わないことをぴしゃりと言いつつ生徒に、背伸びをしていたおれは中途半端な姿勢で動きを止めた。

『なんか……ヤバいの、あの子。あたしが三年の時、二年のバスケット主将が彼女と付き合って酷い目に合ってるし。その後も色々……あつたみたい』

『へえ、あんな可愛い顔して悪女なのか？』

混ぜ返したおれにううんと首を振って、こちらを向いた表情は可愛い後輩への軽い嫉妬心でそんなことを言っている風ではなかった。『本人は全然関係ないの、いい子って聞くし。でも……付き合ったりするとヤバいって』

『はあ？ なんだそりゃ？』

『ま、あたしも別の付き合いのある後輩から聞いたただの噂なんだけどね……なんか死にかけてた男の子もいるって……』

『それはまた、オカルトちつくな話だな』

『そう言われちゃうと馬鹿馬鹿しくなるんだけど……とにかく、気をつけて』

真剣そのものな口調の言葉と共に湯気が立ち上る紙コップを渡され、おれはどうとも答えずその中身を啜った。

死にかけてた男の子、ねえ……。

その元凶だということらしい美少女が、いまおれの目の前にいるわけだが。

まあ、おれはもう男の子って歳でもないしな。

「……それで、ええと、林田くんのお家からお借りしたバーベキューセットのおかげで、なんとかクラス費内で納まりました」

綺麗な字で、几帳面に書かれたレポートの説明を一通り聞いたおれは頷いた。

「わかった。上手いこと算段つけたな」

「ありがとうございます。志摩先生……お加減いかがですか？」

「今朝の電話じゃ39度5分だそうだ」

答えながら、おい志摩よ、お前の知らないところで天使のような娘がお前の心配をしてくれているぞ、この仕事就いてよかったな……などと胸の内で、今頃は高熱に呻いているであろう後輩教師に語りかけた。

地学教師の志摩とは、たまに一緒に酒を飲む間柄だ。

「大丈夫でしょうか？ 志摩先生、たしか一人暮らしだって……」

「ま、同じ30越えの独りもん仲間として、今日あたり見舞い行ってやった方がいいかもな。骨になられちゃ困るし」

「困ります」

神妙にそう言って、おれの軽口にくすりと本條は微笑み、すぐに心配そうな表情に戻った。不謹慎だと思っただらしい。

いい子っていうのは、どうやらその通りのようだ。

紺色の制服の肩先を、長く伸ばしたまっすぐな黒髪がさらさらと音を立てるように滑る。

その艶に少しの間だけ気を取られた。

一回り以上年下の美しい少女の色香に迷ったわけではない、そこに学生結婚して数年で別れた女房の幻影を見たからだ。

元女房は公立高校の教師で、おれは未練たらしく彼女との微かな接点を求めていまここにいます。

「棧田先生？」

「ん、ああ……すまん。ぼんやりしてた」

澄んだ声に我に返れば、小さな顔の割りに大きな目がじっとおれを上目に見つめていた。

濡れたような黒い瞳、白目の部分は青みがかっていて、まるで精巧なドールに嵌め込まれた硝子玉の目だ。

目だけではなく、夢見る様にかすな赤みの差す白く滑らかな頬やそこに影を落とす長い睫毛、薔薇色な唇と全体的にこの少女は人形じみている。

三年の女生徒がヤバいと言っていた意味はすぐにわかった。

同時に、本條に関心を持つ男共が面倒事を起こすのじゃないかという懸念については殆ど心配がなくなっていた。

本條は一種いわくつきの美少女だ。

生徒の噂話によれば、好意を持って近づいた男は皆多かれ少なかれ不幸に陥る。

中学時代、本條玲子が付き合った男は三人。

いずれも本條とは無関係なところだが、不可解な事故や不運に見舞われているそうで、この学園に進学してからも言い寄った男には何かが起こっていると……怪談としても馬鹿馬鹿しい話だが、この人形じみた美貌には似合う話のような気もする。

「あの…… 棧田先生にお聞きしたいことがあるんですが」

小さな口元が躊躇いがちに動いて紡ぎだされた言葉に、ん、と首を傾けた。

「なんだ、死後の世界とかは専門外だぞ」

さっきのホームルームがあつてそう返してすぐ、なんとなくそういう混ぜっ返しはこの少女にとっては洒落にならない気がして、不用意な発言をした自分におれは眉を顰めたが、本條は特に何も思わなかったように軽く微笑んだ。

「違います。 棧田先生って図書委員の顧問ですよね？」

「ああ、さっき風音とのやり取り見てただろ？」

こくりと本條はうなずいて、何がおかしいのかくすくすと笑い出

した。

「お昼の時とか、たまに委員会の話を佐竹さんから聞いてます」
風音と仲がいいとは……少し意外だ。

「どうせろくなこと喋ってないだろ」

あいつがおれをだらしのない教師と言って嫌厭してるのは知っている。

「ふふ……そんなことないです」

「どうだかな、それで？ おれが委員の顧問でなんなんだ？」

「どうして旧校舎の第一図書室を復活させたんですか？」

小さく首を傾げての可憐な問いかけに、おれは黙って腕を組み椅子の背を後ろに反らせた。

たぶん、風音の愚痴を聞いての単純な疑問なんだろうが……想定外の人物から意外な質問が来たものだ。

「なんでそんなこと聞くんだ？」

とりあえず言い逃れの常套手段として質問に質問で返した。

「うーん、どうしてかなって……古い本が多いし。あ、でもルブランの全集は素敵でした。訳者が違つと雰囲気変わるんだなって思いました」

急にやや興奮気味に表情を輝かせた本條に少し面食らったが、黴臭い本を楽しんでくれたのなら結構だ。

委員長業務として専属で管理を任せている三橋も聞いたら喜ばんな、あいつは。

むしろ、利用者なんて騒がしくて邪魔だとか思っつていそいだ。

あそこは奴にとっては、静寂を味わうための場所だから。

「そついうことだ」

「え？」

「お前も知つてるだろ？ いま建ててる新校舎のために旧校舎潰すの。ま、いくらかは新校舎の書庫に移す予定だけど……最後に一花咲かせてやつてもいいんじゃないかなって」

おれにとっては真実でもあり偽りでもある答えに納得したようで、

本條は小さく頷いた。

「素敵なお考えです」

「どうだかな、風音は迷惑がってるよ。あそこを任せてる委員長の三橋が仕事しなくて困るって」

「委員長の三橋くんって先生のクラスの男の子ですよ。佐竹さんと仲のいい」

「おいおい、あいつら犬猿の仲だぞ」

「あら？ そうなんですか……？」

表向きはな、と胸の内では不思議そうにしている本條に付け加えた。風音がガミガミ文句を言って、三橋は柳に風という体で取り合わないから周囲はそう思っているが、夏休み前辺りからあの二人は付き合っている。

淡泊そうな顔して女をとつかえひつかえしている三橋にしては、なかなか長い間保っているが、それだけ風音が色々と抱え込んでいるんだろう。

近頃、風音が思い詰めたような表情をしているのを、この学校のメイン図書室である第二図書室でよく見かける。

それにしても、おっとりしているようで意外に鋭い。

「……本條は、本好きなのか？」

「はい、好きです」

にっこりと実に嬉しそうに、素直ないい返事をする。

志摩の奴……なかなかの役得じゃないか。

おれにロリコン趣味はないが本條の可愛らしさへの好感はほぼ万人が共有できる感情だと思う。

いふなれば子猫や子犬や赤ん坊のような存在が心底可愛らしいと思うような、そういう感情に近い。

「棧田先生のお母様の本も読んだことあります」

実に無邪気にさらりと言ってくれた本條に、おれは後頭部を鈍器で殴られたような衝撃を受け、反っくり返って椅子から転げ落ちそうになった。

いや、実際には落ちずに動揺の表情を見られぬよう天井を見上げただけだったが。

「……本條」

「はい」

完全にワントーン声が低く落ちていたが、本條の返事は素直なままだった。

天真爛漫というものの最強さをおれは母親と女房のおかげで、嫌というほど知っていたつもりだったが……。

「おれの母親の本は……いまだに文庫で本屋の片隅にひっそり売ってたりするが、お前みたいなのがわざわざ選んで手にする類の本じゃないと思うんだがな」

なにせ発刊当時は、女版情痴小説と世間でバッシングじみた攻撃を受けていたくらいだ。

「家に亡くなつたお祖父様のご本がたくさん遺つてて……小さい頃は難しい字が多くて読めないから、気に入った装丁の本だけ出しては眺めてました素敵なのがなくて。その中に」

「装丁が素敵な本って……まさか蓮池に火に包まれた女が立ってる絵とかじゃないよな……」

限定百冊、おれの母親を愛する父と同居人二人といった三人の男達が結集して作った、本として法外な価格の超豪華美装本は大半関係者か母親のコアなファンの手に渡り、市場には殆ど出回っていないはずだが……。

「あ、その本知ってます。昔とても応援していた画家の方から頂いたって、お祖父様大切にしました」

「……そうか。煙草、いいか」

「校内は禁煙ですけど……」

「本條が大丈夫なら見逃してくれ」

「ええ……」

困惑した表情で、少しだけ出入口のドアを振り返るようにして廊下の気配を探る様子を見せてから本條はおれに向き直った。

「あの、大丈夫……みたい、です」

「ありがとう」

割とさばけた性格らしいお嬢様におれは紳士的に礼を述べると、席を立てて窓辺へ異動し、僅かに窓を開けて胸ポケットから煙草とライターを取り出すと火をつけ、細く開いた隙間から煙を逃すように窓際の壁に寄りかかった。

「あの……私、棧田先生が嫌なこと言っしまいました？」

「いや……少し驚いただけだ。そうか、そうだよなあ……」

おれに本條がヤバいと忠告した三年生の女生徒が座っていたのと同じ椅子に背筋を真っすぐにして腰掛け、離れた位置からおれを心配そうに見ている本條が、あの本條家のお嬢様だということの意味をすっかり忘れていた。

江戸後期に舶来ものの小間物問屋から始まり、いまや有名ブランドとのコラボレーションも行う一大アパレル系企業グループに発展している本條家は、昔も今も若手芸術家や工芸家のパトロンの顔を持っていく。

ちょっと考えれば、どこかで繋がっているかもなんてすぐに思い付いたはずだ。

愛すべき同居人の一人は生きていた当時、新進気鋭の画家だった。歳の離れた兄のような画家が、年に数点しか描かないわりに妙に金回りがよかったのは、こいつの祖父さんの支援を受けていたからだったのか。

「おれの親世代の、それもマニアックな本好きにだけ受けてたから油断してた」

「もしかして、内緒？」

手を当てた頬を下に傾け、どうしようかと呟いた本條の妙にあどけないような言葉がおかしくて笑いが込み上げてきたおれは、啞え煙草で肩を揺らした。

「全然、別に隠してるわけじゃないんだけどな。お前、そのお祖父さんが画家から貰ったって本読んでるな？」

「え？ あ、はい」

「あれ、父親の趣味で、超絶えろい話ばっか集めてあるんだがなあ……」

今度は本條が動揺する番だった。

ぴよこんと俯け加減だった頭を上げて、わたわたと両手を中途半端に忙しなく動かす。

「えっ、あのっ、違いますっ……だつて、だつて……ちよつと恥ずかしいけどもそんな風には全然っ、えつと……」

耳まで真っ赤にして、まるで漫画みたいな動揺の仕方をするものだから、思わず吹き出して火のついた煙草を床に飛ばしそうになった。

「わかった、わかった……じゃあ本條はえろいってことで」

「棧田先生っつー!!」

「すまんすまん、冗談だ。確かに超絶えろいがそれだけじゃない、秀逸な短編だけ集めてある……おれの名前の由来も載ってるし、それだろ？」

固く唇を一文字に結んでうんうんと本條がコミカルな動きで縦に首を振った。

完璧といえる美少女だからこそ、本当に漫画のキャラクターみたいで面白い。

黙っていたら、間もなく本條も落ち着いたらしい。

おれは一度煙草を深く吸って、ゆっくりと吐き出した。

「あの本の話に妙な一家の話があるだろ、さっきおれの名前の由来が載ってるって言った、あれ実話だな。丁度、おれがいまの本條と同じ歳に事故で全員一辺に死んだんだ」

「事故……ですか」

「まあ父親はちよつと形が違ったんだが、同じことだ。なにせいま程恋愛自由度高くない世の中だろ？」

「はあ……」

「っつて、言ってもわかんないか」

テレビでも現実でも不倫なんてそう珍しくもない、むしろ当たり前すぎて詰まらないような世の中に生まれ育っては、いけないことと思っても、あの当時の背徳感はあまりぴんとこないだろう。

「当時は結構大げさに騒ぐ奴もいてな……理事長も知ってるし別に問題ないんだ。でも、ほらそういうの“由々しきこと”とする大人もいるからさ。わかるだろ？」

こくりと聞き分けの良い小さな子供みたいに本條は頷く。

それからしばらく、二人の間に左手の指に挟んだ煙草の紫煙と沈黙が流れた。

「あの…… 棧田先生」

「ん？」

「ごめんなさい……」

「なんで、謝るんだ？」

「誰にでも、触れて欲しくないことってあります」

「誰にでも、ね??」

口元から離れた煙草を再び戻しながら、おれは本條の言葉を繰り返した。

きつぱりとした、それこそ古き良き時代の令嬢の毅然さを思わせる響きが、本條が本気でおれに対して申し訳なさを感じていることを伝えた。

?? なんか死にかけた男の子もいるって……。

それが本当のことだとすれば、本條の言葉の重みはさらに増す。

「でも??」

でも?

躊躇う様に視線をさまよわせ、言い淀む次の言葉はなんだ?

知らなくて? それとも悪気はなかったんです、だろうか?

そんなそれこそテンプレートなおれの予想は簡単に裏切られた。

「さつきホームルームで死んだら焼かれて骨になるだけだって、あれって……」

「ああ、妙な家族達の葬式の喪主やって、納骨までやった実感でな」

「わたしも小さい頃お葬式で納骨したんです」

「はあ？」

話がまったく見えない。

というより、誰にでも触れて欲しくないことがある話と繋がらない。

もつといえば、人を馬鹿にしてるのかと思っておかしくない言葉に教師の役も忘れて、素の鬨め面で本條を上から蔑むように見た瞬間、おれは思考能力を奪われた。

感じの悪いおれの視線などでんで問題じゃないといった静けさを湛え、本條は微笑みを浮かべている。

「焼かれても遣った骨は綺麗です、白くて……だって……」

ごうつと、全身の血が逆流したような耳鳴りがおれの耳を塞いだ。

それ以上は、言つな。

声を発しない、反射的に叫ぶ形に開いた口元からぼろりと煙草が落ち、床の上を転がる。

ガタンと大きな音を立てて、本條が勢いよく立ち上がった。

「先生っ、煙草っ！ 火がっ、危ないです！！ きゃっ……」

ガツン、と立ち上がった時ほどではないが結構派手な音がして膝を机の脚に打ちつけたらしい本條がくう……と整った顔をくしゃりと歪め、前屈みになってスカートの上から手で足を押さえている。

おれは一週間働き詰めたような疲労を覚えて、やれやれとため息を吐きながら、足下に転がって細い煙を真つすぐに立てている煙草を鈍重な動きで拾い上げた。

「大丈夫か、本條……？」

「は……い……」

「とりあえず、煙草のこととさっきの話はなかったってことでチャラ、な」

「？」

「な！」

「……はい」

「たしかに、いい子だ??」

「いい子過ぎて、薄ら怖い。」

「なんですか?」

「別に、用事も済んだことだしお互い帰らないか?」

「あ、そうですね。すみません、ずっとお話ししちゃって」

「転ばないように帰れよ」

「はい……失礼します」

余程勢いつけてぶつかつたのか、まだ痛み之余韻が残っているよ
うなおぼつかない足取りでドアまで移動してから、本條は振り返る
と実に綺麗な所作でお辞儀をし、社会科準備室を去っていった。

??でも、お気に入りにしちゃ駄目。

「誰がするかよ、誰が」

あんな取り扱い要注意な天然自然の危険物。

本人は、罪悪感まじりのほんのちよつとした気遣い程度の考えで
おれの中にある、家族に対する、積年の、愛憎入り交じつた不透
明な感情の塊を、一瞬で霧散しかけやがった。

おれの感情はおれのものだ、持ち続けるのも捨てるのもおれがぎ
りぎりまでのたうち回って決めることだ。

あつさりした天使の一言なんかでうつかり救われてしまつてたま
るか。

悩みはもう三年彼女がいらないことくらいな志摩なら平気だろうが。

「不用意に関わりたくない生徒、第一位だな」

それが、最後まで揺るがない評価となつた。

本條玲子は。

二年生に進級し、よりもよつておれが初めて担任として受け持
つたクラスの生徒となり、さらに三橋と付き合い始め、学園を去る
まで間接的に大いに振り回してくれた迷惑千万な天使として長い間
記憶に残ることとなる。

その日は、会食だった？？そう、会食。

相手はそんな単語がぴつたりな人物だった。

その人は父の友人で、父とおれとで食い潰し尽きかけている棧田家の資産の一切合切を管理してくれている。

あと三年で米寿を迎えるというのに、とてもそんな歳には見えな
い。

流石に現役は引退しているが、それでもあちらこちらの企業や団体の名誉職に就いている。

もう三年は会っていないと思うのだが、老いても衰えぬ健啖ぶりは健在で、王道フレンチの店でフルコースを平らげて料亭街からぶらぶらと、会員制クラブ経由で飲み屋通りに出て歩く後姿を追いながら、電話と運転手と秘書付きの黒塗りの車を返したことを心配すれば凝った作りの籐のステッキを振り回すようにして呵々と笑った。「この辺りで僕に何かしようなんて輩はいんさ」

「……あなたが言うとお洒落に聞こえないですが、黒岩さん」

「そうかね？」

「そりゃ某大手銀の元頭取じゃあ……」

さつきから、一体何人の慌てた様子の黒服共に頭を下げられていることか……同時にお前誰だという目線を受けていることか。

「おれ、一介の教師なんですから。勘弁してくださいよ、本当」

「讓児君は相変わらず大人しいなあ」

「や、これでもまだ大人げないと言われてる方で……」

「どこが？ 飲む打つ買うの一つも無し。君のお父さんなんてそりゃ派手だったものだ。僕もまだひよっこだったから、揉め事の相手さんとの示談金のやり取りは毎回手を焼いた。青野さんがいなかったらちよつと無理だったな」

「はあ……申し訳ありません」

青野さんとは、黒岩さんと同世代の棧田家が頼っている弁護士である。

不肖の父親を持つ息子の肩身は狭い。

「なに、棧田家には恩義がある。大学を出してもらい、就職の際は推薦状まで書いて頂いた。当然のことだ」

黒岩さんは父と一回り年上、棧田家の書生として曾祖父と祖父に仕えていたらしい。

いまや時代ドラマくらいでしかみかけないようなものが、まだかろうじて残っていた時代のおそらく最後の世代の人だ。

それが縁で、祖父の代に棧田家の資産の管理を委託することになった。

いまや見る影もないが、棧田家は昔、大正辺りまでは屈指の山林王であった。

祖父としては、大手に送り込み見事エリートコースに乗ってくれた、才覚ある子飼いの銀行員の手腕を、すでに没落していた棧田家復興のよすがにしようという目論みも多少あったに違いない。

「恩義を返すつもりが、むしろ没落していく手伝いしたようなもので申し訳ないね」

しかし、彼が管理人となつて十年も立たない内に祖父は亡くなり、棧田家史上最強のドラ息子である父が当主となつたから、便宜も復興もない。

「いやっ、全面的に父が原因ですから！！ おれがこうして好き勝手遊んで暮らせるのも黒岩さんのおかげだしっ！！」

もともと祖父の代にはもう残された資産の大半は切り崩されていて、父はともかくおれはその華麗なる棧田家の恩恵には殆ど預かつた記憶もないが。

近所よりは少しでかい家に住み、日常目にする調度がどうやら百貨店なんかで売っているものより良さそうなもので、高等遊民で働いていない父親が始終家にて遊んでくれた程度のものである。

「遊んでって、君、働いてるじゃないの……立派に」

僕が知ってる棧田の歴代当主はもつと暢気にしてたものだ、家老としては若君がお劳しいよとしんみりした調子で仰られる。

「もう、そんな時代じゃないですよ。第一、黒岩さんのが出世して雲の上の人だ」

いま、棧田家の財産は敷地の大半を削った屋敷と、都心ビル街の土地一角と、一応哲学の研究者の一人と認知された父と作家の母の本から入る微々たる印税、おれが住むマンションの一室くらいのものだ。

所有する土地から入る地代の半分で税金の類を払い、四割で誰も住んでいない屋敷を維持管理して、残る一割は生活費、印税は臨時収入、教師の給与は小遣いといった感じだった。

少子早世の気のある棧田家で、直系はいまやおれ一人。親類縁者もろくにいない。

だから浪費も気楽に出来る、おれの代で棧田の家はたぶん終わるだろう。

そんな状態でも、黒岩さんはあくまで昔の恩と一応雇い主ということで、向こうからみれば小僧っ子のおれを立て、会う時はわざわざ東京から出向いてくれる。

それでいて飲食遊興にかかる費用は全部出してくれるのだから、まったくあべこべというか情けない話であった。

「そうかねえ……資産高や地位名誉はともかく、とにかく棧田家の当主は代々なにかこう……尽くしたいような魅力があるんだよなあ」
すんません、大人しく詰まらない当主で。

雨上がりの濡れたアスファルトの路地を軽やかなステッキの音を立てて、ゆったりと進む後ろ姿はおれにとっては数少ない、尊敬できる大人の後ろ姿だ。

頭が切れて、胆力があつて、情に厚い、洒落者??昔のエリートそのもののような人だ。

肩を並べて歩くななんて恐れ多い。

知の申し子と二人の並ならぬ同居人に言わせたあの父ですら、黒

岩さんを兄を慕うが如く、雇い主でありながらその言葉に従った。尻拭いを散々させた身なので、頭が上がらないというのもある。仕事や友人としての部分は対等であったが、黒岩さんはあくまでも自分が仕えた頃の棧田家の坊っちゃんとして慇懃に父と接していた。

だから二人の様子はどこかちぐはぐあべこべで、子供の頃に二人の様子を眺めているのは面白かった。

「黒岩さんが父の為に父の面倒みてくださるのは、感謝と幸運という言葉に尽きますよ」

「本当に、あの時は……穰和坊ちゃんしげかずは莫迦まかというか、無責任といつか、君はまだ中学卒業したばかりだったんじゃないか、たしか。

君がいなかったら遺体の腹を殴りつけたくなる程の憤りを感じていたね僕は」

「はあ……腹、ですか」

父の腹には太いミミズが横にへばりついている様な傷跡が、右から臍の辺りにかけてある。

「でもまあ、依子さんのいないこの世なんか耐えられなかったんだろ。自分の腹かつ捌いてその筋から奪い取った嫁さんだ……ああいう命がけで生きていくような真似はね、僕みたいな小手先でやってる人間には出来なくて、逆立ちしたって敵わないものさ」

「それこそ馬鹿なんですよ……ところで、まだどっか行くつもりですか？」

「まだって、飯食って一軒軽く寄っただけじゃないの」

「はあ」

「ええっと……三叉路の角だから、たしかそこを抜けたところだな」
目的地への道を確認しているらしき黒岩さんに、あんた本当に七十八のジジイなのかと思わず内心呟いた。

さっきのクラブでテーブルにいた女の子の手もちやつかり取って撫でたりして、しかも商売抜きで喜ばれていたし……短く整えた髪は綺麗に白いが、皺を刻んでいる肌の色つやは良く、若い頃から

鍛えていた体はまだまだ頑健そうで、下手すれば六十そこそこにも見えなくはない。

「証券の顧問時代にちょっと面白い若いのがいてね、金融から足を洗って一城の主になったらしい」

「はあ……」

金融から足洗って……言い方としてどうなんだろうか……。

「そのうち行ってやろうと思っていたの、さっきの店で思い出してね。尋ねて店に電話して聞いたんだが……三角州に建つビル、おお、あそこだあそこだ」

そついや、一度席を立ってしばらく戻ってこなかったがそんなことをしていたのか。

「讓児君、早く来たまえ！」

気がつけばとくに路地を抜け、数メートル先の三叉路のY字になった三角州に建つビルの手前に立って手招きし、黒岩さんが地下へ降りるコンクリートの階段を指し示している。

その階段を下りた先で、まさか自分が副担任を務めるクラスの生徒と店主であったその父親に出くわすなんて思いもせず、その時ははいはいとぼやきながらおれは黒岩さんに駆け寄ったのだった。

まったくもって世間というものは、狭い……。

あまり人に知られておらず、カウンターのみの一人静かに落ち着けるバーでいて、深夜でもまともな旨い飯が食えるというわけで近頃鼻屑にしている店の、料亭街の売れっ子芸者だという常連仲間が評するところ『女なんてコマして、薬漬けて、泡に沈めりやお終い』といった顔をしているそうだ……おれの生徒に対して随分と酷い言い草だなおい、と思うが否定出来ないところが辛い。

一年二組、三田村陽輔。

常連仲間の評通りヤクザな風貌をしているが、これほど健全かつ安定感のある生徒も珍しい。

入学試験はトップの成績で、入学式の新入生代表。

以降、三度行われた定期試験で学年一位を独走している。

成績さえ良ければいいといった歪んだ甘えもなく、自律心と自立心に富み、性格は見た目とは正反対に温厚でクラス委員として三十人の生徒をまとめる統率力もある。

そんなわけで、職員室での教師達の間で三田村の評判はすごい。いい。

一方、生徒同士はどうかといえば、親しい者や日頃から交流のあるクラスメイトはともかくとして、直接の接点がない大多数の生徒の間ではその筋のヤバい家の息子だと囁かれかつ信じられている。

そんな誤解を、周囲に比べ一足早く体格が急成長してしまった中学時代から受けているらしい三田村であるが、長年抱き続けている淡い恋心があるらしい。

「で、県大会優勝で告白する……と」

おれの言葉を肯定するように、びゅっつと縦一筋に宙を切る竹刀の先が唸った。

「はい。むっちゃん守れる男って証明とともにっ!!」

証明も何も、たしかこいつは中学で全国行ってなかったか？

「いや、単純に中学ん時は体格差で有利だったから。やっぱり高校の部は違うでしょう」

「そうか」

そうなのか？

ならば体格差がそうもなくなったいま、まるで道場破りの如く仮入部時に剣道部員総勢25名を倒し望まれて一年主将の座についているのはなんだ。

単に弱かっただけなのか、この学校の剣道部が……過去の成績なんざ知らんが。

それにしても骨格が日本人離れしたがっしり具合でいて、痩せぎすな、黄色い茶髪のでかい男が道着に袴姿というのは形容し難い迫力がある。

体格も髪の色も、母親が西欧系アメリカ人のクォーターであるの

が原因らしいが。

そんな風貌はさておき、その性質において道場の奥に掲げられた『文武不岐』の書がこれほどじっくり似合う奴もいない。

「そういや、道場に刀を隠してるんだって?」

三田村にまつわる生徒の噂の一つを尋ねれば、まさかと三角の細い目をさらに細めて三田村は笑った。

はつきり言つて、三田村の笑顔は慣れていない者には怖い。

「居合の道具は家ですよ」

持つてるのか……ていうか居合に剣道とはたいした剣術少年じゃないか。

「お前、今の状態で十分だと思つぞ」

「だめだめだつて、ぐああつ、想像しただけで挫ける……」

「ああ?」

「だつて、断られるだけならまだしも、それで距離が広がつたらもう……立ち直れないつてつ!!」

「三橋を見習え、あいつなんてなあ付き合おうが別れようが最初っから何もなかったように平気の平坐だ」

「あいつは動じなさすぎ……ていうか異常。人として見習いたくない」

「至極まっとうな意見だと思つが、お前はあいつの親友じゃなかったのか?」

「それとこれとは、別! なつ先生、大人の必殺口説き文句教えてくれよ」

「お前な……そんなことでおれをここに呼びつけたのか」

大事な相談がある、教室や職員室では言えない、部活後の剣道場で……などと、いつになく真剣深刻な口調で言うから、何事か思つたじゃねえか。

「そんなことじゃないつて!! 人生の一大大転機!!」

「大げさだ……大体なあ、そんな必殺口説き文句があるならこつちが教えて欲しいもんだ」

「え？ 何？ 先生好きな人いんの？」

「っと……いや、まあ……」

しまった……と思ったが時すでに遅し。

覆水は盆に返らず、一度放ってしまった言葉はもう口の中には戻らない。

しかもとつさに切り返せず、微妙な間を開けてしまった。

「その……なんだ、そういうのってまあ、あれば便利じゃないか。

色々……もてたい時とか女の子揃えた店行った時とか……」

なんとなく適当にごまかして、さすがに道場じゃ喫煙するわけにはいかないよなあと左手を胸ポケット辺りにうるうるさせていたら、三田村は呆れ返ったように溜め息を吐いて、雑談しながらも構え気味に握っていた竹刀を下ろした。

「先生ってさ……」

「なんだ」

「気が付いていないみたいだから教えるけど、都合悪くなると煙草に手をやるうとする癖あるんだよな」

そう言って、尖ったように細い強面を急に気味悪くにやにやさせる。

「だからなんだっ！！ お前がにやにやすると怖いんだよっ！！」

「カウンターの内側って、外側にいる客のことがよく見えんだよね」

「そうかい……」

「そっち側の、出入口のコンクリートブロックんとこなら一応外だし、グラウンドや校舎からは死角になるよ」

本当、こいつは性格がいいから性質が悪い……。

よっ、と声を上げて竹刀を天秤棒みたいに両肩に担いだ三田村を横目に、言われた通りブロックに腰掛けて煙草を取り出し、カチリとライターの音を鳴らす。

「で、先生誰に恋してんの？ まさか鈴千代姐さんとか？」

「違っ……」

まさに俺に対し、生徒であるこいつの印象を極道者のすけこまし

と評した常連仲間の名が出て思わず顔をしかめ、一度深く吸い込んだ煙をゆっくりと溜め息と共に吐き出した。

「……別れた女房」

ふーん、つて、え?! はあ? へえ? ええええっ?! などと、背後で一人奇声を上げてはしきりに驚いている三田村を放置し、膝に肘をつけて両頬を支え、啞え煙草で空を見上げれば入道雲がもくもくと盛り上がった夏の青空であった。

「うるさい、放っとけ」

啞え煙草のまま、特に三田村へというわけでもなくもごもごと負け惜しみのようにぼやく。別れた女房に未練たらたらで何が悪い。

いい女なんだ、あいつは、元妻の頼子は??? いまや別の男の妻だが。

「必殺口説き文句……ないもんかな……」

「ですよねえ……」

同調する声に気がつけば、すぐ傍らに竹刀をかついでおれとコンクリ?トで固めた三和土に三田村が袴の裾を擦ってしゃがみこみ、おれと同じように空を見上げていた。

「……今度、三橋にでも聞いてみるか?」

「あいつなんかアテにならないよ、先生……」

「だよな」

「ですよ」

はあ〜つと同時に同じような溜め息を吐けば、ますます情けない男二人の気配が濃厚になったので、あえて強引におれは話題を変えた。

「おまえ、進路票……あれ、本気か?」

「んー……まあ、いまんとこ」

俺もこの学校に数年以上勤務しているが、英字のそれも世界に名だたる校名が書かれた進路票は初めてだ。

真野も流石に困惑していた。

「正直ちよつと迷ってるんですけど……けど、研究だったらあつち

のが良さそうかなくて」

「……一つ忠告しとくが、日本の学者社会は至極閉鎖的だぞ。繋が
り無しにはじめからあっちで成果あげて帰国したところであまり評
価されん……一生あっちでやってくならともかく」

「ええっ、だったら一旦、先生と同じところ行こうかな……オレ、蕎
麦と鯨日常的に一生食えないとか堪えられないっ」

「ったく、どんな理由だよ……」

しかも“受ける”じゃなくて“行こうかな”とは、国内はフリー
パスの気であるなこいつは……まあ実力考えると否定できないが。

しかし、そんな簡単なことじゃなかったはずなんだが……一応、
日本随一の国立大だ。

「受験前にカレッジ通って成績取るの面倒っぱいし」

「狭き門だが、一定の水準以上の論文出せて認められたら、国費留
学つてのも……まあそこまでじゃなくても？類の教授なら多少紹介
してやれるぞ」

「……ちよっと考えて、親父とかと相談してみる」

「そうしろ」

「先生つて、何気に面倒見いいいな」

「うるさいっ！ あれだからな、後追いつてきたら容赦なく後輩扱
いしてやる……」

「ええっ、ひっで」

「……で、告白はどうすんだ？」

「……」

三田村が沈黙したので、おれも黙ってぷかぷかと煙草を三度ばか
り吹かした。

「……あああああ……っっ……！！！！」

一生やつてる??。

一年二組、三田村陽輔。

文武両道、素行良好、統率力に優れたクラス委員。

職員室の評判はすこぶるよろしい、十年に一度の秀才児にして高校生としてこれ以上ない平凡な安定感を誇る見た目に反して温厚な性格の少年。

結局、県大会どころか地方ブロック大会においても優秀な成績を修め、それを我が身の自信の根拠と……した割りには悶々と夏を過ぎ、秋も過ぎ、冬になって漸く、幼なじみだという一年八組にいる少女・佐々木むつみに告白し、必殺口説き文句がなくても上手かったと彼が父親を手伝ってカウンターの内側に立つ、近頃のおれの鼻屑店で報告兼自慢をされた。

まったくもって揺るぎない安定感を持った、腹の立つ生徒である？！。

学生の本分は勉強、ここは伝統ある進学校。

中間・期末と定期に実施する試験、その間に差し込まれる一斉実施の実力テスト。

試験が終わった一週間後に一年生は五教科合計と科目別、コースが分かれる二三年生は五教科平均と科目別の成績上位百名迄の一覧が張り出される。

ここ数年、その是非を問う議題が職員会議で上がるが、別にいいんじゃないかと思う。

社会に出るまでもなく、産まれた時から人による序列に多かれすくなかれ組み込まれるのだから、今更成績だけ隠したところで無駄だろう。生徒共^がだつて馬鹿ではない。

そんなことより問題は……。

「おい、通してくれっ……ったく」

がやがやと騒がしい一階中央階段に向かい、廊下を塞ぐ生徒達を押しつけながら、毎度のことになんざりして舌打ちした。

本校舎は中央階段各階の踊り場、成績上位者の一覧はそこに張り出され、休憩時間に入るたびに廊下まで生徒達でこつた返す日々が二三日続く。

各階への移動はこの中央階段がメインで、他には東側校舎の階段があつた。

おれが普段から根城にしている講義棟の社会科準備室、時々訪ねる第一図書室のある旧校舎、日に一度は顔を出す第二図書室、副担任である一年二組の教室。

全て、中央階段から見て東側に位置している。

それなのに、日に数度顔を出す職員室は本校舎二階の西側突き当たり。

つまり、普段の居場所から職員室へ行くためにはどうしたって中

央階段とその廊下は避けられない。

広い空きスペースがあるのはここだけとはいえ。

「こんな人が通る場所に成績なんか張り出すな……ん？」

毎度のぼやきを口にしながら通り抜けようとして、他の生徒と比べて極端にひよる長い生徒二人組に目が留った。

成績を気にしてわざわざ人込みに向いてくるような二人ではないから、つい期限に厳しい真野が取りまとめる資料を、時間ぎりぎりに職員室に届ける途中だったにもかかわらず声を掛けた。

「三田村、三橋！」

「お、棧田先生」

二人組の一方、全体的にぎすぎすと尖った体型で、薬の売人でもしていそうなチンピラヤクザ風の生徒がいち早く気が付いて、へらへらとこちらに手を振った。

急に振り返った連れの動きに、もう一人の生徒も首を巡らすようにして振り返る。

こちらはいかにも穏やかそうな優男だ。

「なんだお前ら、こんなところで」

自分で声を掛けておきながら二人がこちらに気付いた途端、軽く後悔したのは相手にも伝わったらしい。

「ひでえな、先生……」

「関わりたくないなら、どうして声をかけるんだか……」

チンピラヤクザならぬ三田村が飄々とした口調で腕を組み、優男こと三橋が呆れ声で肩を竦める。

「人間いるはずのない奴をそこに見かけると、違和感覚えるものなんだよ」

「ご挨拶だな、先生。オレ達生徒なんだから成績見に来るの普通だろ？」

「見に来るまでもないだろ。特にお前は、三田村。今回も相変わらずトップ独走だ」

実に信じられない事に、一年生ではこのチンピラヤクザが入学試

験からずっと学年一位を維持している。五教科各科目不得意と言えるものがなく、総合得点では二番手三番手とは大差をつけての一位は不動のもの。

三学期の実力テストともなれば、掲げられる名前には王者の風格すら漂っていた。

一教科に特出した成績を誇る生徒もいるから、さすがに全科目で一位というわけにはいかないが、教員達の間では十年に一度の秀才と評判だった。

「あー、それはまあ当然といつかなんだけど……」

「お前のすぐ下の順位にいる奴等が聞いたら、腸煮えくりかえるような台詞だな」

事実とはいえ、狂犬のような見た目と正反対に温厚謙虚な性格である三田村にしては尊大な発言に、ちよつと驚いてそう返せば、慌てて両手を振りながら三田村は否定した。

「いや、そういう意味じゃなくて！今回はじゃなきゃおかしいと狙ったというか……ああ、ちくしょうっ！！」

「は？」

急に思い出したように、これまた珍しく本気で声を荒げた三田村は、面食らっているこちらに構わず隣にただ突っ立っている三橋へと向きを変え掴みかかる勢いで食ってかかった。

「どうっ考えても不公平だろっ、三橋っ！！」

「お、おい?!」

「単に一位じゃ賭けにならない」

「全教科で一位はキツイって〜!!」

頭を掻き毟っている三田村に、事情が掴めず困惑しているおれとは対照的に平然とした様子で、三橋は訴えを退けるようにため息をついた。

「だから事前に、それでいいのかって聞いたはずだ」

「聞かれてやめるとか男が廢る！」

「とにかく、こっちは全教科十位入った……“アマデウス”のイ

ンペリアルガトー」

「あれ、いくらすると思ってるんだよ！ ケーキ一切れに1500円とか有り得ねえー!!!」

「いや、あれは妥当じゃないかな……ただの喫茶にして、本職シヨコラティエ並のコーティング技術に特筆すべきはあの……」

「だあつ、濃厚なアーモンドペーストに絶妙なコアントローの風味だろつ……それはもう過去十数回は聞いてるつての」

「……お前ら、楽しいことやってんな」

どうやら試験の成績に食い物を賭けていたらしい。くだらない……と、おれは肩を落とした。

「要するに、三田村が全教科で一番取ったら勝ちな条件だったわけだ」

「そ、三橋は全教科十位内。ドローは割り勘。不公平だと思わねえ？ 先生」

「ま、たしかにただ一位じゃお前の場合賭けにならんわな」

「だあつ！ 先生までつ!!!」

「むしろ平均三十位そこその三橋が、十位内入る方がきつくないか？」

中堅上位の中で成績順位を伸ばすのは、下位から順位を伸ばすより難しい。

「違うつて、先生！ こいつ必要最低限の成績さえ維持してればいいとか言つて、普段試験勉強しねえんだから!!!」

昨日の学年ミーティングで、三橋が急に成績伸ばしたやつぱりあいつはやれば出来ると、真野を筆頭に教員等が騒いでいたが……どうやらこれはぬか喜びになりそうだなと、おれ自身にとっては至極どうでもいいことを考える。

「ま、賭けちまつたもんはしょうがないさ」

「飲み物はセットのにしろよつ!!!」

「しない。賭けに負けた方が好きなものを奢る約束だ」

「そんな濃厚そうなケーキ、コーヒーのが合うんじゃないか？」

「アマデウス」は紅茶専門店なので」

「ああ……“本條家の洋館”近くの高級住宅地マダム御用達の店か。チョコレートなら、あの店オリジナルで出してるアールグレイが合うだろうな」

久しく行っておらず、三橋気に入りの濃厚ケーキとやらは食ったことがないが、あそこの紅茶は実に美味しい。

「ああいった店に出入りしてるなんて意外ですね、酒場だけかと思ってた」

「ま、それなりに美味しいものには目がないからな」

「……じゃあ、三田村それで」

「あきらかに高そうだろうがっ!!」

「どうせ奢るなら、相手を満足させなきゃ奢り損だぞ、三田村」

「先生~~~~っ!!」

「睨むなよ、普通に怖いから。しかし、お前が狙って落とすとはなあ……」

「数学！ 数学だけっ！ 杉田の試験で満点なんて無理だっ！」

「は？ 一位でいいんだろ？」

満点が条件ではなかったはずだ。

学年主任で数学教師の杉田が試験を作れば平均点は著しく下がる。

奴はサディストで、コンクールやオリンピックレベルのやたら思考力を要する試験問題を作る。

まあ、おかげでこの学校の理数系の大学合格率は非常に高いのだが……文系には辛い。

「この卒業生であるおれにとって、終わりのない追試はトラウマだ。

「まあ……数学は、な」

ぼつりと意味深長に三橋が呟く。

「なんであいつがこの学校に……茨城だろ？ 越境もいいとこだ

よ、中学の全国模試の時からオレあいつより上だったことないし」

「同位満点だからな」

「おいおいおい……」

あのサディストのテストで満点取るって、どこのクラスの生徒だ。
「数学限定とはいえ、不動だからな。杉田先生の授業と数学研究部目当てで入学したらしい」

「そーそー、天才ってああいうの、もはや変態レベルだよ」

この二人も普通に学生な会話をするんだなと新鮮な気分で数学のテストの順位を見上げた。

三田村がテストで一度も勝ったことがないとは尋常じゃない。

「一組の林田って……」

林田隆志……一組ということは風音や本條と同じ組か。

「そんなにすごいのか、その、林田っていうのは」

「三橋の読書と箏の数学版。暇さえあれば計算とか検証とかに没頭して、難問解いてはうっとりしてるってさ」

「へえ、それはまた……」

三田村が言うなら誇張はないだろう、思わず軽く口笛吹いた。

本人自ら話すこともなく、邦楽なんてマイナー分野に興味を持つ生徒は少ないから知られていないが、三橋は三橋流箏曲という一派の宗家家元の息子だ。

公な演奏活動は行っていないが相当の弾き手で、三田村の言によれば弾いている時は“まるで別人になる”らしい。

「喩え方がおかしい、三田村」

「そうでもないんじゃないか？」

おれの言葉に、苦虫噛み潰したように顔を顰めた三橋に苦笑した。暇さえあれば本を片手にその世界に没頭している三橋だが、それは一種の自己防衛のようにおれには見える。

こいつは生まれ持った“天分の才”から、現実ではないどこか美しい彼岸へと常に誘いかけられている者特有の気配を持っている。

こいつは、おれの母親や、同居人の日本画家、編集者と同じ人種だ。

自己を侵すような才がどんなものかなどわからないが、寄りかか

れる大樹の幹が必要なのは知っていた。

おれの父親が、母や同居人達にとつてそうだったから、絶妙のバランスで築かれていた女に男が三人なんて異常な家庭におれは育った。愛すべき大人達はもう皆この世にはいない。

三橋を現実世界にとどめているのが、おそらく読書であり、来る者拒まずで付き合つては別れる少女達なのだろう。

仮初でもこいつには退避場所が必要だ。

初対面の三橋へのおれの直感は当たっていた。おれは三橋に第一図書室の番人を任せた。

おれの捨て切れない執着を隠した、時を止めているかのようなあの場所を。

「しかし、つくづく変人の集まる学校だな」

「あなただつて卒業生でしょう」

「うるさい」

「ところで、職員室にでも行く途中だったんじゃないんですか？」

「……あー」

そうだった、真野の資料。

本来の目的を思い出し、おれは自分の額をぺちりと叩いた。

「お前らが妙な場所にいるからだ」

「うわ、ひつで！ 責任転嫁かよ……」

「そうだ。じゃあな」

二人に背を向けて、職員室へと向かいかけてすぐ前方からやって来た生徒に、歩きながらつい溜め息を吐き出せばくすくすと鈴を転がすような声がした。

「……幸せが逃げちゃいます」

「もうこれ以上逃げるもんはないからいいんだよ、本條」

「まさか……」

その、まさかなんだよ天使様。

白く華奢な指を握って口元にあてて困ったように微笑む、絵に描いたように美しい少女におれは胸の内を呟いた。

なんだって、こついつたタイミングに……現れるんだか。

一組の本條玲子。さっきまで話していた少年二人が御用達らしい喫茶店近くにある、“本條家の洋館”と呼ばれる重要文化財級の家屋敷に住む令嬢にして、近づいた男はみな不幸に見舞われるという噂だ。

ご本人は純真可憐な見た目そのままの、無垢で心優しき少女だが、何事においても行き過ぎたものは危険物となるものだ。

ひよんなきっかけで、心の奥深くに沈めていた澱を消し去られそうになって以来、“皆殺しの天使”とおれは密かに本條を胸の内ですう呼んでいる。

ちなみにおれの母親が書いた本の愛読者だ。好事家の祖父さんが遺した本棚に母の本がたくさんあるらしい。

「本條も成績見に来たのか？」

「いいえ、日直で。志摩先生のところに集めたプリントお渡しした帰りです。棧田先生、私もって……？」

ことりと首を傾げて、大きな目を不思議そうに見開いた本條に、ああそうか本條はあいつらを直接知らないのだったなと思いつた。三橋のことは同じ図書委員をやっている風音から話は聞いてはいるらしいが。

隣のクラスといっても異性だから体育の授業も別だろうし、芸術科目の選択教科が一緒でなければ顔を合わす機会もないだろう。

「いや、こつちの話だ。成績……今回はちよつと残念だったな」

「え？ でも、順位のために勉強しているわけではないですから。そう言つて、やや遠目に張り出されている成績を見上げて目を細めた。長い睫毛が儂げな影を白い頬に落とす。

「三橋くんって、たしかいつも三十番目位じゃなかったかしら？
すごく頑張ったのね」

「そのおかげで十位常連から落ちたんだろ……あいかわらず、いい子だな本條は」

五教科合計順位で十位の三橋洋介の名前のすぐ下に、本條玲子の

名前があつた。

「そんなこと……あ、そういうば。さっき真野先生がとっても怖い顔して棧田先生を呼び出すって放送室の方に……」

「そうか……」

「どうやらもう手に持った書類は完全に遅れたらしい。」

「……ふふ」

「なんだよ」

「棧田先生って、二組の副担任なのに、他のクラスの子の成績も把握してるんですね」

「たく、これだからー」。

「……仕事だからだ」

「気にかかる生徒のことは、何でもつい把握してしまうのはおれの悪い癖だ。」

「元妻の頼子にもよく、世話好きのお人好しとからかわれたものだが、そんな人間は自分の女房を追いつめて出奔させたりはしないだろう。」

「志摩先生はそんなことはないです」

「お前らの成績がどーのこーの言う、学年会議の直後だからたままだよ。おれが勤勉な教師なら、真野が鬼の顔して放送室行かないだろ。風音は？」

「今日のお昼は図書当番だそうです……あの」

「暫し、目線を左右に彷徨わしてから、おずおずと何かを切り出した本條を、何だとおれはいまさつき出くわしてからはじめてまともな本條を真っ直ぐに見た。」

「ちよつと困ってるみたい、最近……佐竹さん」

「あん？ あいつが委員で三橋に困らされてるのはいつものことだ。愚痴聞かされてるんだろ？」

「いえ……ちよつと、違うみたい……」

「は？」

「何だ、それは……と言いかけた時、校内放送のスピーカーが間の

抜けた調子の呼び出し音を鳴らした。

『 棧田先生、至急職員室までご連絡ください』
キンキンした固い口調の真野の声は、スピーカーを通すとさらに尖って聞こえる。

「あ、ごめんなさい……急いだ方がいいと思います、棧田先生」
ぺこりとお辞儀して、慌てて教室へと向かいかけた本條を待てとおれは引き止めた。

「風音が、どうした？」

「あ……えっと……」

何故か心なし頬を染めて、歯切れが悪い。

まさか年末に別れた三橋とヨリを戻したとか……ちらりとそんな事を考えた。

佐竹風音は、図書委員の副委員長を任せている少女だ。

ただ第一図書室の番人とするために委員長として仕立て上げた三橋と違い、こちらは真正正銘の委員会を切り回す副委員長である。
最初に委員会で顔見た時、男に苦勞しそうな顔つきしてるなあと思っ

た。
高校生のガキの癖に、不倫にはまる二十歳過ぎの小娘みたいな風情を漂わせている。

案の定、佐竹風音は常に心ここにあらずの三橋に恋し、来るもの拒まずな彼と付き合い、長く続いた方らしいが手応えのない曖昧な関係に耐えきれなくなり自ら休止符を打って別れた。

おれの見たところでは、たぶん肉体関係もしっかりあつたはずだ。
まったく最近の高校生ときたら……と思いかけて、自分も散々高校生
の時に、頼子に恍惚を繋がりはずとも教え込んでいたのだった。
人の事はとやかく言えない。

風音は、性格は真面目で几帳面で潔癖、しかし固いだけの女の子
でもなく適度に融通もきくし愛想もわりがいい。

ただ頑なで、どこか刹那的に張り詰めているような危うさがあった。

生徒としては、かなり危なっかしくて気がかりな部類だ。

「さっさと見え、こっちは忙しいし中途半端に言いかけて去られちゃ気にかかるだろ」

「……すみません」

「しゅんとしてないで、見え」

「たいしたことではないんですけど……あの、林田くんにつきま
とわれてるって」

「はあ？」

妙な偶然があるものだ。

ついさつき、変態的な数学少年との評判を聞いたばかりの生徒が、
風音を追い回しているとは……。

しかし、風音をねえ。

「林田って、お前達と同じクラスだろ、どんな奴なんだ？」

「ええつと、数学がすごく出来ます」

「……それは、まあ、あれ見りやわかる」

おれが成績順位表を指差せば、あ、そうですねと本條は恥じ入る
ように口元を両手で閉ざした。

「あと、ちよつとぶつきらばうだけど、いい人だと思います」

「その根拠は？」

「文化祭の時に、出店で使うバーベキューセットを貸してくれま
した。ざつと計算して材料費と予算が合わないって。誰かがお願い
するより先に。林田くんのお家、茨城で遠いのにわざわざ一式担い
で持って来てくれたんです」

なるほど、同じ変人でも三橋と違って心ある変人というわけか。
にやりとおれは思わず口元をつり上げた。

本條の言う通りなら、さぞかし風音は困っているだろう……いや
困るどころか迷惑だと、すでに文句の一つや二つきっぱり面と向か
って林田に言っているかもしれない。風音は気が強い少女だ。

カウンターの内側でピリピリと潔癖に眉を吊り上げて防御線を張
る、その様子が目に浮かぶようだった。

「そりゃ、困らせといていいんじゃないかねえか？」

「え？」

「あいつはな、ちょっとは“追っかけられる恋愛”やったほうがいいんだ」

「……林田くんにですか？」

「別に林田とかいう奴じゃなくてもいいが……いい奴なんだろう？」

「ええ……たぶん」

「なら、問題ない。さてと……真野の説教聞きに行くか、じゃあな本條」

「はい、お気をつけて」

合っているような合っていないような言葉をかけて、背を向けて手を振ったおれに小さく本條は手を振り返した。

律儀な少女だ。

そしてもちろんおれは、本條への言葉通りに真野の説教など自ら好んで聞きに行くはずがなかった。

職員室に行くことは早々に諦め、途中にあるやに臭い喫煙室へに入る。

スーツの胸ポケットからライターと煙草を取り出し、カチリと火を点けた。

「追いかける……か」

ただ吹かすだけの啞え煙草で開けた窓を外をしばらく見詰め、一息大きく肺に届くまで煙を吸い込みはああ……とおれは窓枠に突っ伏し自分の吐き出した煙に頭をつっこんだ。

「いつまでもなにやってんだかなあ……おれは」

ただ同じ職に就いて微かな接点を希望にする形で、元妻の頼子を追いかけて……内向的な中学生でもあるまいしと、あらためてまともな煙草を吸いながらおれは第一図書室を思った。

おれと頼子が出会った場所、拙く青い情事を繰り返して……そして??おれの情愛の源を閉じ込め隠した場所。

『哲学／思想』の棚の裏には、父が発注し、画家が装丁し、編集者が編纂した母が出した最期の本がある。

元妻の頼子が宝物だと大事にしていた本。

来年の夏か、遅くとも秋口には旧校舎は潰され更地になる予定だった。

取り壊されるそれまでに、時間を止めた静寂を湛えるあの場所を、必要としない者になれるのだろうか……おれも、三橋も。

「追いかけられる……ねえ」

なんとなく笑える気分になってくつくつと一人込み上げる笑いに喉を鳴らし、腕時計を見た。

昼飯返上で職員室へと急いでいたから、まだ昼休みは二十分ばかり残っている。

「困ってる風音でも見物しにいくか……」

資料は、放課後の真野が帰った後に出そう……急ぐ内容の書類ではないのだ、早め早めに仕事を片付ける真野が、自分の都合に合わせて設定した期限というだけだ。

「若いもんはいいねえ」

そう、冬曇りの空に向かって呟いて、おれは第二図書室へと向かう先を変更した。

『 ですから、ぜひ一度お時間いただけませんか……』

「お時間なら、用件をお伺いするだけ差し上げてますよ」

あからさまに嫌味なおれの返答に、あははと愛想笑いを聞かせてくる出版社の編集者だという若造　だと思っただが　に、社会科準備室に設置された電話の受話器から口元を離して舌打ちした。春休みも間近。

などと言えば期末試験も終わって、いかにも休み前の長閑な業務のように外部の人間からは思われがちだがとんでもない。

一年で一番忙しい時期なんじゃないだろうか……。
新年度に入学してくる生徒の受け入れ準備。

受け持っている現一年生の二年生への進級考査、データーベース更新のための生徒情報の見直しと修正、クラス編成……等々。

うっかり担任なんかになってしまったら、今度はクラス単位生徒単位の指導計画書なんてものも作成および提出しなきゃいけない。

そして、まさにうっかりこれまで副担任の立場から担任へと、ありがた迷惑極まりない昇格が決まったばかりだった。

おれと現在組んでクラス担任をしている真野の、結婚および産休計画のためだ。

いわゆるでき婚、うまくやったな真野と褒めてやりたいところだが、それによつて生じる仕事の皺寄せをこつちに寄越すな。

見たことがないような笑顔で「後任は棧田先生を推薦します」と前触れ無しに会議で言いやがった。事なかれ主義な会議において異論など出るはずもなく……。つたく、いまどきの若い奴は本当になに考えてやがるんだか。

予測できる範囲内のことだけに、根回ししとかなかった自分のミスに腹が立つ。

「とにかく！　申し訳ないですが、三月中は東京でお会いする時

間なんてとてもとれませんから」

『あ、では四月ならよろしいんですね？』

すかさず、切り返してきた相手に、しまったと思っただが遅かった。『四月なんて入学式の時期だから、お忙しいかと早めの日程で考えてたんです。そうですか。ええと……丁度、一週目の土曜日の夜に近くまで行くんですがいかがでしょう？ 土曜なら学校お休みですよね？ それでしたらわざわざ東京までご足労いただくなくても済みますし。午後からだありがたいですが、午前中でも構いません』

立て板に水、とはこのことだ。

淀みなくぺらぺらと、畳み掛けてくる。なにが、ええとだ……こいつ、鼻っからこれを狙ってやがったのか。

「いや、あのですね……」

女だったら大喜びしそうな甘さのある若い男の声だが、若造……じゃねえな。

こういう手合いはこの日を断ったら、即座に次の候補日を挙げてくるだろう。

『タイミングがいいなあ。実は、解説を依頼しようと考えていた先生のお宅で、夜に打合せでした』

「ですから、まだお受けするとは……」

『もちろんです。後で取り止めでも先に押さえるに越したことはないのです……なにせお忙しい先生だから』

「お忙しい方に無理していただかなくても結構ですが」

そうやって断れない状況に困い込もうたって、そうはいかないところが、意外に強めた語気で「いえ！」と電話口の相手はおれの言葉を否定した。

苦手なタイプだ……そう感じた。この手の勘は外れない。自分の仕事を愛し、自らが惚れ込んだものに情熱を捧げる編集者だ。

そういった相手は、通り一辺倒な理由では引き下がらない。母親の著作物の権利は全ておれが遺産として相続していた。

品行方正な大人は眉を顰めるような母の小説だったが、一定の根強いファンが存在する。特に芸術学術方面に明るい人間に、何故か受けがよかった。そういった種類の人間は書籍に金を惜しまない。つまりは一定の買い手が見込めるのだ、そのため時々思い出したように選集や全集の許可を求める連絡が出版社から入る。

文庫や単行本の再編、再販以外のそういった“まともな本”の申し出を、おれはこれまで全て断ってきた。

母の最期の本は、あの本だという思いが強すぎた。

父が金を出して話を選び、母の愛人の画家が装丁を手掛け、母の信奉者であった編集者がまとめあげた、あの本。

『……先生以外に、“棧田依子全集”の解説なんて、個人的には考えられませんから』

耳を打った名は、硬派な週刊誌に連載しているエッセイで人気を博し、ベストセラー作家の仲間入りをしている哲学をやっている大学教授だった。院生時代、おれが出入りしていた研究室で助手だった男だ。

おれが大学を辞める頃には異例のスピード出世で、当時でいえば助教授になったが、その後すぐに彼を持ち上げた教授の娘との縁談を断ったかで研究室を追われて去った。しかし、捨てる神あれば拾う神あり、私学に招かれ結局は教授になっている。

こいつストーカーか……と胸の内を呟く。本気でおれを囲い込むつもりだ。

「へえ、驚いたな。院生時代世話になりました。そのよしみか昨年夏に頼まれて、教鞭とられてる大学の生徒さんの教育実習中に世話したばかりです。どうぞよろしくお伝えください。申し訳ないがその日は予定が入っていて無理ですね」

丸一日ではないが予定は入っていたので、嘘ではない。

徹底抗戦するおれの気配を察したのだろう、そうですかとあっさり相手は引いた。戦略的撤退。

『また、折りをみてご連絡します』

「暢気なようできてそれなりに仕事がありましたね。愛想のいい返事はなかなかできませんが、それでもよければどうぞ」

おれにしてはかなり露骨に断ったつもりだったが、そうさせてもらいますと素直な返事をして相手は電話を切った。

「文芸旬秋の中谷とかいったか……冗談じゃねえ……」

通話時間13分??長々と……とは言い難く、されど短くもない絶妙な通話時間。

近頃……過去に絡んだ誘いが立て続けだな……。

ふと、回想から我に返れば、婉然と微笑む紅鮮やかな白い顔とお銚子を差し出す白い手が目の前にあった。

「どうぞ」

「どうも」

おれが差し出した猪口に、そそと、いい吟醸香のする酒が注がれる。

ただ酒を注ぐだけ、これとあざといしなを作ったわけでもないのに、妙に色っぽいのはさすがは黒岩さんご指名の芸者だけある。

まだ若い、二十代半ばといったところだ。聞けば三田村の父親が経営しているバーでたまに会う、常連客の鈴千代と同じ置屋だという。

「へえ……じゃあ鈴千代姐さんとこの新人さんが」

「そっ」

「どうぞよろしくお見知りおきを」

酌をしてくれた女はおれと黒岩さんとの間で綺麗なお辞儀をした。

「しかし、相変わらずお元氣そうですね……黒岩さん」

「そうでもないよ、季節の変わり目なんか節々痛くてね……今度この人と一緒に箱根に行くの」

十分元氣だろうが、おい。

「いやん、いつそんなお約束……いまいまなどと、きやつきやつはしゃいでいるご老人と若芸者のやり取りを冷めた気分で見詰め、猪口に注がれたばかりの酒をあおる。」

「おつ、流石は棧田家のご当主!!」

なにか、流石でご当主なんだか……傾きつぱなしの家に遺る僅かな資産を食い潰しているだけの男に向かつて。

「そういや……年明けすぐの、誕生日のお祝いもしないで」

「いいよ別に、もうこの歳じゃめでたくもないし」

「黒岩さんなら百を余裕で超えられると思いますかね、まだ人が生まれて成人するくらいありますよ」

「学生服の頃から、口だけは減らないんだからなあ」

黒岩さんは、御歳七十九。

大正期は山林王だったが昭和に入って傾いた棧田家の書生として、曾祖父と祖父に仕え、独立してからは棧田家の資産管理を引き受けるようになり、亡き父は友人として彼に全幅の信頼を置いていた。

そんな黒岩さんは、大手銀行の頭取職を退いて楽隠居の身でありながら、いまもあちらこちらの名誉職についていまだに方々への影響力を保っているよう人にも関わらず、棧田家の直系というだけではない高校教師のおれを会えばやたらと立ててくれる。

「ほらほら、遊んでないでご挨拶にひとさし舞ってお見せしなさい」

はい、と返事をして模様も艶やかな着物の裾をぞろりと引いて女が立ち上がる、やがて三味線が鳴る、すつと襟元に指を沿えて女がくるりと身を翻し、もう一方の手に開いた縁を赤く染めた白い扇がひらひらと蝶のように舞った。

唄が始まる。襟に添えられた手が扇を持つ側の袖の端を取り、開いた扇がひらりひらりと器用に上向き下向き空を切ってピタリと止まる。斜に背けた紅も鮮やかな白い顔を傾けて、女が流し目を送るようにこちらを向き、片袖を持った手を扇に沿えたところで唄の切れ目。

鳴り続ける三味線に合わせて、船を漕ぐように背を反らしては戻し、くるりと回って、両腕を広げて戻し、見ている者を焦らすように誘うように扇を差し出し一歩二歩と後ずさって、女は滑るように

しやがんだ。また唄が始まり、扇が鏡であるように化粧か髪を直すような仕草を取って、扇をすいっと流して立ち上がり、流した先の扇が女の顔を隠してしなしなと舞う様は、酌をしてくれた時の若さにそぐわぬ艶つぼさだ。

「若いが、なかなかだろう?」

「はあ……ええ、まあ」

「ま、鈴千代に比べたらただけどね……でもこのコがいま一番かわいいね」

酒場で会う時は洋装で、同世代の蓮つ葉な毒舌女としか認識がないため、今ひとつぴんとはこなかつたが鈴千代が売れっ子であることは知っている。本当にちっともそうには思えないのだが……。

それより、あなたは普段東京にいるはずじゃないのか?! と思わず内心つつこみ入れてしまふ。

父のお目付役にして遊び仲間だっただけはある。本人の言では「一緒にいないとお目付役にならないから」と、締めるところは締めていたようだが……結婚前に心中事件を二度も起こした放蕩者だった父の面倒事の後始末を、棧田家の弁護士と共に片付けてきた黒岩さんには、後に“理知の権化”と呼ばれた父も頭が上がりなかつた。

「そうですか。親父みたく粹人じゃないんでね、よくわかりませんが……で、何の話です?」

「んー?」

「ただうまいもの食わしてくれるだけじゃなく、こんなお座敷構えてもてなしてくれるなんて、なんか話があるんでしよう?」

「せつかちだねえ、讓児くんは……ま、あっさり看破しちゃうとこは流石は穰和坊ちゃんのご子息だけど。もつとさ、若者らしく鼻の下伸ばしてでれつとしなさいよ……まったく。仕方がないか、僕と違って美人見慣れてるからね君は」

たしかにそれはあるかもしれない……と、思わず口元を覆って考えてしまった。

美人といわれる女から言い寄られたことは何度かあるが、友人知人が口惜しがるほど美人に思えなかった。

大抵の女がおれには同じような感じに見えた。もちろん顔かたちの区別やタイプの違いはわかるが、それだけだ。

「君のお母さんの依子さん、震えがくるほど綺麗だったからなあ……一度しか見たことないけど君のお嫁さんも」

親子揃ってとてつもなく面食いなんだからと、黒岩さんは苦笑した。

「ええ、まあ、おかげさまで」

「ちよつとは謙遜しなさい」

「謙遜するとかえって嫌みになるんで……」

「そういうところはお父さんそっくりだ。……もう、勉強はやらないの？」

「え？」

「テツガク」

はっ……と笑って、染付けの器に盛られた、みずみずしい半透明な白さの蛸と出汁を含ませた白ずいきとオクラとを軽く梅酢で和えた先附に箸をつける。

「大学辞めて何年だと思ってるんですか、やりたくったって出来やしないですよ」

「じゃあ、やりたいんだ」

トン、シャン……と三味線の音がやけに大きく耳に響いた。

「お粗末様でございます」

閉じた扇を手前において、床に手をつきお辞儀した女によかったよと黒岩さんは相好を崩して声をかけ、こちらを見た。

「……いつまでもいい加減に教師なんてやってるような柄でもないだろ？」

東京の大学で、助教の口があるとのことだった。

「建前で修士からでも、今時、博士でなきゃ難しいでしょう」

「建前だろうがなんだろうが、そう出したからには条件は条件だ。」

ま、その後も含めて最終的には君の実力次第だけだね」

再来年度のことでもまだ表に出ていない、その気があるなら夏までに返答してもらえれば話をつける、それが黒岩さんの用事であった。いつにも増して旨い料理を食わされ平らげたはずだが、ほとんど記憶に残っていない。

母の全集を出したいという編集者。

一度、断ったはずの、父と同じ道につながる職の口を世話するという黒岩さん。

思えば全て前兆だったのかもしれない??。

八年ぶりに、元妻の頼子に会った。

根負けして編集者の人間と打ち合わせに落ち合った二流ホテルだった。

まったくの偶然で、公立高校の若手教師で構成された有志の勉強会をホテルの会議室でやっていたそうだ。

幹事役で、参加者はとうに帰ったあと。

借りていた会議室の手続きでフロントにいた後ろ姿を喫茶室から見かけて、編集者そっこのけで立ち上がり、近づいて、その細い手首を掴んだ。

別れた時より少し痩せた頼子は、どこかしたたかな女の気配をまとっているように見えたが、歳を重ねた女特有の底意地の悪さは微塵もなく、皮肉にも別れた後の頼子のが、おれの母親の棧田依子を彷彿とさせた。

結婚していた当時、おれは頼子に母親の形容し難い魔性と純真な淑やかさが男に見せる黄金律の幸福の面影を求めて、頼子を追い詰め、出奔させた。

掴んだら……止められなかった。そこがホテルのフロントというのもおれを助長させた。

声を上げて驚いた頼子をたしなめ、部屋のキーを受け取ると無言で逃げないように掴んだままでいた手首を引っ張って、気がつけば

殺風景なホテルの部屋のベッドに頼子を縫い止めていた。ただの暴漢だ……と、後になって首を括りたくなるほど後悔したが、その時は後先考え無しだった。

黒岩さんに品行方正、真面目で大人しいと言われ続けてきたが、やはり無鉄砲むこう見ずな棧田の血筋だったようだ。

別れた女房だとか、いま他の男の人妻であるとか、めちゃくちやに抵抗されているとか関係なかった。

日常生活の事故や真つ当な夫婦間の行為では有り得ない青黒い痣が、白い肢体の、服に隠れる箇所は無数にあっても関係なかった。

頼子はホテルの部屋に連れ込まれてから、おれと別れるまで一言も口を利かず、ただ果てたおれに一度だけ微笑んだ。

天女のような、壮絶な微笑みだった。

あの第一図書室に隠して封印したつもりでいたおれの何かが、がちりと歯車が嵌って動き始めたような気がした。

昼休み。

職員室に呼び出した三橋の、ぽかんとおれを見る間抜け面に苛立ちを覚えて顔を顰めた。

「8月10日迄だ」

端的におれがそう言えば、ゆっくりと不審気に三橋は眉を寄せる。

「何が」

は？ なにいつてんだこいつは。

「鍵」

半ばうんざりした気分で、三橋にそう言えばようやく理解したようだった。

おれとここで話すことっていったら第一図書室に決まってるだろうが、この巡りの悪いガキめ。

左手で胸ポケットの縁をなぞりながら胸の内で三橋に毒づいたが、苛立っているのは三橋に対してではないことは自覚していた。

どう見ても虫の居所が悪いように見えるだろう職員室の席に座る

おれを、三橋は暫く立つたままぼんやりと見下ろし、独り納得したように軽く頷くと「わかりました」と涼しい顔で淡々とした返事を
して、おれに構わず背を向けて職員室を出ていった。

どうしてそんなこと言い出したのかも、規約違反じゃないのかとも
言わない……なにか察したか、それともなにも考えていないか。

どちらにせよ、まったく嫌な奴だ。

嫌な……ガキ。

おれは胸ポケットから手を離して、立ち上がった。

教員用の鍵保管庫のところまでいき、一つの鍵を取って職員室を
出て東に向かって歩く。

もう、二度と会うこともないと態度で示してきたような頼子だっ
たが、宿泊者カードに携帯電話の番号を残していた。手首を掴むだ
けでは心もとなく、逃げるのを防止するため部屋を取る時におれが
書かせた。

その場で覚えた番号に、半信半疑で電話をかければ頼子本人が出
た。

「でたらめ書けばいいものを……会えるか？ こないだと同じと
ころで」

頼子の声を一言も聞かないまま、日時を告げて一方的に電話を切
った。

指定した日時に、指定した場所へやはり半信半疑で行ったら、そ
の辺からいま出て来たみたいいな様子で頼子がいた。

「ちよつとは……一見、誰とわからないように装ったりしろよ」

実際には県境のお屋敷町に頼子はいま住んでいるはずだった。勤
めている学校もその近くだったはずだ。

同じ県内でも完全に地域圏が異なっていた、県を横断している路
線で20分は電車で揺られる。

だから八年も会わずに済んでいた？ 県内の若手教師の会だかな
んだかしらないが、おれが近くにいるのを知っていて。

「これは逢い引きだ……“不倫”だぞ」

なんで元女房と不倫関係になんか陥らなきゃならんのだと、自分で言ったすぐさま胸の内ではやいて溜め息が出た。

頼子はやはり黙っていた。まるで口が利けなくなってしまうているようだった。違うとわかるのは蹂躪している時だけだ。

なんで元女房を蹂躪しなきゃならないんだ……泣きたいような気分顔をよくしゃくしゃに歪めたら、そつと頬に頼子の手が触れた。

また、あの壮絶な微笑みだ。

「おれを憎んでるのか……？」

白い体に浮かぶ痣は、いくつか消えかけていたがそれ以上に新しく色濃く浮かんだ痣があった。

「頼子……！」

ガタンーと、しゃがみ込んだ正面、本棚の裏板を外し、それまでの思考を中断させた。

そこにぽっかりと空いた隙間に手をつ込み、重ねた紙袋に包まれた本を取り出す。

厚い本棚の壁に遮ぎられた、昼休み終了を告げるチャイムの音が遠く聞こえる。

「……そういや、三橋に会ったのもこれ見てた時だったっけ」

あの時は、焦ったな……前触れ無しにいきなり入ってくるんだから。

「まあ、迷い込んで来たんじゃないか」

入学式の日だった。

たしか、晴れがましい日に似合わない、しとしと陰鬱な雨が降っていた。

普段から静かな場所だが、雨のおかげで余計に静かに感じられた。だから、静寂を渴望していた少年が引き寄せられたのかもしれない??。

なにもかもを静寂の中に沈めてしまうのに、人々から忘れ去られた第一図書室ほど都合のいい場所はなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7804v/>

棧田教諭と生徒達

2011年11月29日03時46分発行